



## TNR 活動に伴う葛藤

TNR 活動（ノラ猫を一旦捕獲し、不妊手術をした上で元の場所に戻すこと）は、猫の殺処分やノラ猫によるトラブルを無くしていくための取り組みであり、全国に広がっていることはこれまでのマガジンでも触れてきました。今回は猫のためにと TNR 活動を始めた人がぶち当たる壁（と私は思っている、少なくとも私はぶち当たった）について、いくつかの角度から考えてみたいと思います。最初にぶち当たる壁であり、活動を続けていく中でなくなる葛藤。それは、**妊娠しているノラ猫の墮胎手術**です。

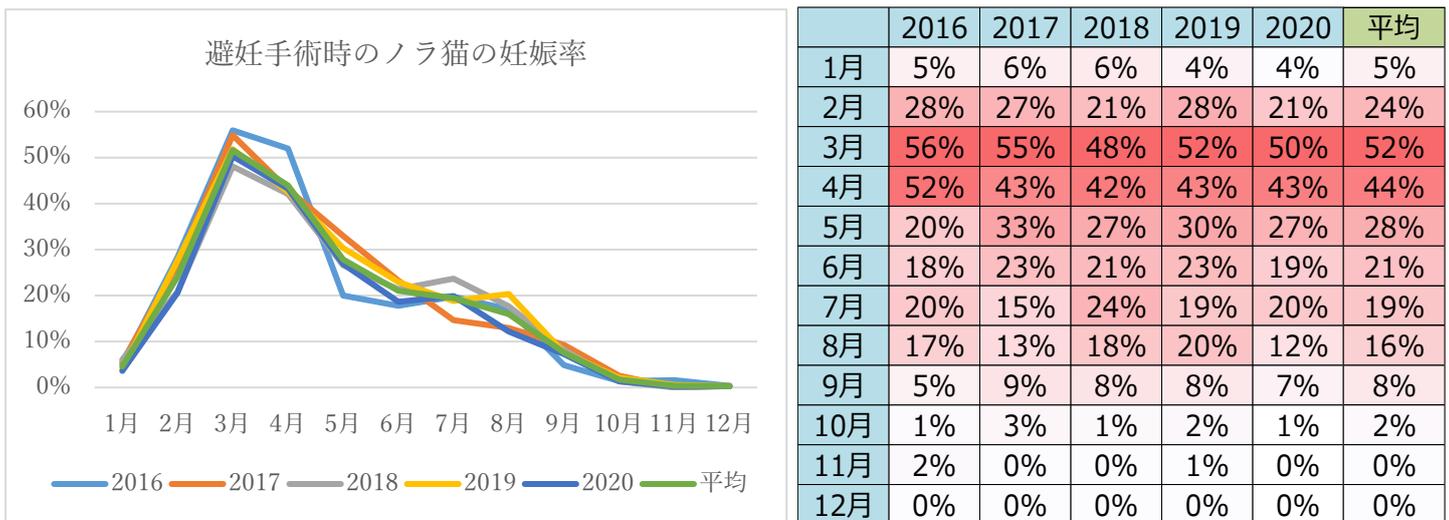
猫の殺処分を無くしたくて TNR 活動をしているのに、そのために母猫の中に宿っている命を墮胎（殺処分）するということは**大きな自己矛盾**であり、関わっている人に大きな葛藤や罪悪感を生みます。ただ、そうせざるをえない現状が今の社会の中にあることもまた事実です。正直このテーマについて深く考えることは私にとっても精神的にしんどいので、あまり触れたくないのですが、それもまた猫に対して失礼なことだと思うので、今回のマガジンで向き合ってみたいと思います。

## 客観的なデータから現状を把握

なぜ TNR の際に墮胎手術を避け難い現状があるのか、まずは感情論を除いて客観的なデータから猫の妊娠出産を把握したいと思います。

### ■猫の発情シーズン

「猫の発情期シーズン」で検索すると、だいたいどこのサイトや文献にも『**1～9月の期間が発情シーズンで、春と夏にピークを迎える。**』と書いてあることが多いです。ノラ猫に関しては実際のところどうなのか、ひと月に 700 匹ほどのノラ猫の不妊手術を実施している「のらねこさんの手術室」の過去 5 年間のデータを見せていただきました。手術を実施した 32,556 匹のうち、メス猫は 17,058 匹その妊娠率を表で見てください。



北摂 T N R サポートのらねこさんの手術室 避妊手術データ (2016-2020)

妊娠率のグラフは5年間分がほぼ一致しています。2月から妊娠しているメス猫が急激に増えだし、3月がピークで50%を超え、4月からは出産ラッシュを迎えますが、妊娠率も44%とかなり高い値をキープし、5月から徐々に右肩下がりになり、10～12月は限りなく0%に近いオフシーズンなるようです。年によっては、7月の妊娠率が6月を上回ることもあるようですが、平均してみると、6月よりも7月の妊娠率が低いようです。

ネットや文献に書いてある情報と比較すると、『1～9月の期間が発情シーズン』ということとはほぼ合致しますが（10月の妊娠率は低いので、1～8月と書いた方が適切ですね）、『春と夏にピークを迎える』ということに関しては、一致しないようです。また、メスの発情は日照時間と関係があり、1日の日照時間が14時間を超えるようになると反応して発情を迎えると書いてあったりします。そこで、のらねこさんの手術室がある大阪の日照時間と比較してみたいと思います。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均
大阪平均日照時間	146.5	140.6	172.2	192.6	203.7	154.3	184.0	222.4	161.6	166.1	152.6	152.1	170.7

気象庁ホームページより、大阪の平均日照時間：資料年数30

[https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml\\_sfc\\_ym.php?prec\\_no=62&block\\_no=47772](https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_sfc_ym.php?prec_no=62&block_no=47772) (2021.5.26閲覧)

3月の妊娠率がピークで4月も高いということから考えると、発情のピークは2月ということになります。しかし、日照時間のデータで見ると2月の日照時間はかなり短いようです。日照時間のデータを今回初めて見たので、見方が違っている可能性もあるので、日照時間と発情関係は無いとまでは言い切れないのですが、日照時間だけではない何かが発情の大きな要因になっている可能性がありそうだなと思いました。夏が暖かいというレベルから死ぬほど暑いレベルに変わってきてしまっていることも猫の発情に影響を与えているのかもしれない。あるいは飼い猫とノラ猫で何か違いがあるのかもしれない。

余談ですが TNR は妊娠率がかなり低く、まだそんなに寒くない 10 月 11 月に頑張れたらこんなに悩む必要もないのと思うのですが、どうしても行政機関から発行される助成金は 4 月から始まり年末には無くなってしまふことが多いです。そのためせっかく妊娠率の低い時期に TNR の実施率が上がらないというジレンマがあるように思います。助成金が有限であるならば、発行期間を絞ることも有効な策じゃないかなと思ったりします。あとは TNR をするなら暖かい時期にと考えて春先を選択する方も多いような気がします。でも春先は妊娠率が極めて高く、メス猫にとっては最も過酷な TNR 時期だといえます。

## 猫の妊娠期間と子猫の成長

猫は交尾から約 2 ヶ月で出産を迎え、妊娠前期の 1 ヶ月間は見た目ではあまり分かりません。妊娠後期になると見るからにお腹が大きいように見えてきます。猫は一回の出産で 1～9 匹の子猫を出産します。のらねこさんの手術室のデータを見ると、平均で 4 匹の子猫を出産する母猫さんが多いようでした。子猫は生後 1 週間ほどで目が開きはじめ、1 ヶ月頃から徐々に離乳していきます。生後 2～3 ヶ月で親離れすることが多く、成熟の早いメス猫では生後 4 ヶ月で最初の発情期を迎えます。



TNR 病院では、早期不妊手術（8～16 週齢（2～4 か月齢）の性成熟前（未発情の時期）に行われる手術のこと）を推奨している病院が多く、早くて生後 2 ヶ月半頃から避妊去勢手術が可能になります。日本では最初の発情期を過ぎてからという獣医さんも多いですが、猫の過剰頭数の問題に対する解決策として、アメリカでは 1993 年に米国獣医師会 (AVMA) が、ほか動物病院協会(AAHA)、 Human Society of the United State などの団体もこの早期不妊去勢手術を支持・奨励しています。8～16 週齢という子猫に手術することについて、尿道の発達が未熟になるのではないかと仮説のリスクが心配されていましたが、複数の研究の結果、そういった副作用などが特に手術時期によって発生するものではないと報告されています。

## ■ 選択肢と3つの難しさ

TNRをしようと計画をしている現場でお腹の大きい猫が居た場合、大きく分けて以下のような選択肢があります。

- ① 墮胎手術を病院に依頼する。
- ② 一旦TNRを延期し、子猫が生後3ヵ月近くなつたところで、母子共にTNRをする。
- ③ 出産し子猫がある程度育つまで外で見守り、離乳したところで子猫のみ保護し母猫はTNRする。
- ④ 母子共に保護をして保護環境下で出産子育てを見守り、母子ともに里親探しをする。

どの選択をするのか、次の3つの難しさを考慮して考えていく必要があります。

### ■ 事前の見極めの難しさ

3月～9月までの長期間に渡り発情と妊娠出産を繰り返しているノラ猫。妊娠前期の段階では見た目では判断が付きません。避妊手術を行って始めて妊娠していたことに気づくことも多くあります。飼い猫であれば、エコー検査をして判断することもできますが、生粋のノラ猫さんの場合、麻酔をかけずにエコーをすることは不可能に近いです。麻酔は体に負担が大きいため、気軽に何度もできるものではありません。妊婦さんであればなおさらです。

### ■ 捕獲の難しさ

もうひとつ忘れてはいけないのは、ノラ猫の捕獲の難しさです。1回目は捕獲器があればスムーズに捕まってくれることが多いですが、猫もバカではありませんので1度捕まったタイプの捕獲器には50%の猫は二度と入らなくなります。そのため、捕獲できたタイミングが最初で最後の通院のチャンスになることも多いです。捕獲したものの「ちょっとお腹が大きい気がするからやっぱり放そう」と捕獲器から出してしまうと、捕獲器にはもう入らないけれども妊娠出産能力のあるノラ猫を作り上げてしまい後々苦労することもあります。

### ■ 保護・譲渡の難しさ

妊娠の可能性のあるノラ猫を保護し、室内にて出産子育てを見守るという方法もあります。保護をするためにはまず次の4つの要素が必要です。①ノラ猫を保護できる環境（静かで、広すぎない隔離部屋または大型のケージ）、②触れないノラ猫のお世話をできる人員、③母子共に里親を見つけるまで関わる覚悟（見つからなければ飼い猫にする覚悟）、④長期的な飼育にかかる費用の捻出。揃えるのはなかなかハードルが高いですが、これを

妊婦猫さんの頭数分用意することができれば、保護も選択肢の一つとなります。また、全く人に慣れていないノラ猫さんの場合、室内に閉じ込められたストレスで出産した子猫を食べてしまうこともあります。保護ができれば必ずハッピーエンドになるわけではないところも難しいポイントです。

## 実際の現場で

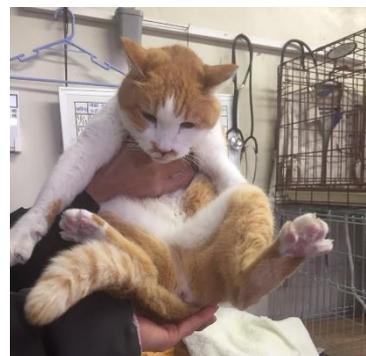
ねこから目線。に寄せられる相談では、「自分にご飯をあげているノラ猫のTNRをした。でも墮胎手術はしたくない。」という内容がある一方で、「自分にご飯をあげているノラ猫のお腹が大きくなってきた。これ以上増えてしまうと困るので一刻も早く不妊手術をしたい。」という内容もあります。前者は自分の家のお庭にご飯を食べにくる2匹程度のノラ猫さんを責任もってお世話をしたいという依頼主さんであることが多く、後者は10匹以上のノラ猫のお世話をしている依頼主さんであることが多いです。どちらの方も真剣にノラ猫と自分と地域のことを考えた結果の相談です。自分の目の前にいる数匹のことを考えているミクロな視点なのか、広く地域全体の沢山のノラ猫のことを考えているのか。判断の基準はその猫にメインで関わっている人が見ている視野に大きく影響を受けます。

お腹の中であってもすでに宿っている命であり、子猫の命もその子猫を必死に育てている母猫のことも尊重してあげたい。と思う反面で、ノラ猫を増やさないためのTNRであり、将来の殺処分ゼロを達成するためには今は心を鬼にして効率重視で取り組みねばならないという現状があります。



私どうなのかといえ、今から18年ほど前に行った初めてのTNRの時は臨月のノラ猫さんには産んでもらうという選択をしました。当時の猫の殺処分数は現在よりはるかに多く、年間26万頭にのぼっていました。しかし、当時の私の視野の中に収まっていたのは自分の家の近所に住むノラ猫3匹と、その子たちにご飯をあげてくれる老夫婦だけ。とてもミクロな視野だったといえるでしょう。墮胎手術をするのは嫌でした。1匹の母猫が産む子猫だけであれば里親さんを見つけきることができる自信もありました。そこで、老夫婦に懐いていた母猫はなるべく室内に入れてもらい、室内にて出産子育てを見守り、生まれた3匹の子猫は離乳したころに里親さんに譲渡しました。そして母猫の不妊手術を実施し一件落着となりました。お腹の子も含めて守ることができました。が・・・実はそのあと10年後の後日談があります。当時出産してもらった母猫は「たまこさん」と名づけられ出産を機にほぼ老夫婦の飼い猫になっていたのですが、10年の間におばあちゃんが亡くなり、とうとうおじいちゃんも倒れ、保健所に収容されてしまいました。偶然たまこさんの子猫の里親になってくださったNさんが別件で保健所に立ち寄った際に聞き覚

えのある名前の収容猫を見て、私に連絡をしてくださり事態が発覚しました。大阪にいた私はとりあえず新幹線に飛び乗って静岡に帰り、おじいちゃんに連絡を取って顛末を把握しました。そして、最終的にたまこさんはたまこさんの子猫2匹の里親さんになってくださったAさんが里親にもなってくださることになり、なんとか事なきを得ました。当時の私はミクロな視野で先を見る視点もありませんでした。とはいえ当時の自分には最善の決断だったと思います。だれかに強制されるのでも背伸びをするのでもなく、自分ができる範囲で、自分ができるところをできる時にする。それがボランティアの基本だと思います。



保健所に収容されていたたまこさん

では今の私はどう判断するかというと、自分がメインで関わっている現場であれば墮胎手術を選択します。年間の殺処分数が3万にまで縮小した現在ですが、それでもまだまだノラ猫は多く、私自身の活動範囲の拡大にともない、ひとつの現場で30匹くらいの猫がいることもあります。そうなる時期によっては5匹以上の妊娠猫さんがいることもあります。全頭を保護して対応する場所も、そのお世話をする時間的余裕も今の私にはありません。冷たいですが、守りながら殺し、殺しながら守っているような活動です。ねこから目線。のお仕事で関わるケースのようにメインで関わっている方が他にいらっしゃる場合は、その方の決断に従うようにしています。一度顔を上げて見てしまった社会問題という景色を、顔を伏せて見なかったことにすることは私にはできません。多くの猫たちにとってそれは幸運なことかもしれませんが、私の身の回りにいる猫たちにとっては不運なことかもしれません。「よその猫ばかり見てないで自分をもっと見てよ」そう飼い猫に言われている気がする事が時々あります。

命に対する線をどこで引くのか。どれくらいのバランスで活動をするのか。きれいごとでは片づけることのできない生々しい決断を日々せまられています。

## おわり



小池英梨子

活動：NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

仕事：猫専門のお手伝い屋さん「ねこから目線。」として開業。